

# ホトトギス

一月号

ホトトギス

昭和二十四年一月二十八日出版  
全五号 第一号 第一巻 第一号 第一巻 第一号 第一巻



## 風雅の小筥〔五十九〕

廣太郎

先月は、平成八年五月一日からホトトギス社は東銀ビルに移転し、ここから又新たな一步を踏み出した事を書いたが、思えばオーナー会社に移転の打診をしてから結構早くに決断をした。実はそれは急がなければならぬ理由があつたのである。そう、御存知の方も多いと思うが、ホトトギス平成八年十二月号は一千二百号、つまり創刊百年の大きな節目を迎える準備が始まつていた時期に重なつてしまつたのである。あまり移転先を吟味している余裕が無かつたのも事実であるが、オーナー会社の担当の方は思つてもみなかつた好条件で移転先を紹介して下さり、快適に仕事を続ける事が出来た。そしてその年の十月二十五日にはホトトギス創刊百年記念歌舞伎として虚子が初代中村吉右衛門の為に書いた「髪を結ふ一茶」がホトトギス同人で歌舞伎役者の片岡我當丈により東京の歌舞伎座で上演され、翌日は年尾忌が行われたと同時に記念能楽、こちらも虚子作の「実朝」が鎌倉芸術館で上演された。そして翌二十七日には東京の新高輪プリンスホテル（当時）で「ホトトギス創刊記念祝賀会」が、三笠宮若杉殿下、妃殿下御臨席のもと行われたのである。

考えてみれば現在までの時点を考えると、この時期がホトトギスのひとつの全盛時代であつたのかも知れない。今あらためて、ホトトギス平成九年四月号「創刊百年記念号」を手にとって見ているが、頁数は六百三十ページ、厚さは二十七ミリある。執筆者の殆どの方がもう今はこの世に居られない方で、しみじみと懐かしい思い出である。

# 廣太郎句帳 廣太郎

令和三年一月五日 カトリック新聞選者吟

笛 鳴に 日 輪 淡く 輝 けり

一月五日 ニク文化センター

初旅は母の 看取りといふ 大事  
寒 鯉の 動 け ば 水 の 従 へ る

一月六日 蕉心会

雨 男 雪 を 降 ら せ て み せ ま せ う  
藪 巻 を さ れ て 幸 せ さ う な 木 々

この 鴨 は オ レ ン ジ ソ ー ス が 美 味 し さ う  
動 く 陣 動 が ざ る 陣 鴨 の 陣

雪 吊 を 風 が 奏 で て ゆ く 静 寂  
首 都 の 空 白 く 塗 り 替 へ 寒 に 入 る

走 り 根 の 命 の 鼓 動 冬 木 立  
悴 む 手 昔 は ビ ア ノ 弾 け ま し た

一月八日 菅屋ホトギス会

風 花 の 都 心 は や が て 白 銀 に  
寒 雀 点 が 零 れ て 穂 と なる

一月九日 野分会菅屋例会

味 噌 餡 が 決 め 手 餠 餅 の 贅  
恋 多 き 女 の 指 や 歌 留 多 取 る

や は ら か く 餠 餅 を 受 く 前 歯  
洗 礼 を 受 け し 心 に 歌 留 多 取 る

歌 留 多 取 る 六 年 生 で 達 人 だ  
一 月 九 日 青風会菅屋例会

白 味 噌 に 家 紋 の 矜 持 雑 煮 椀  
そ の 奥 に 音 階 奏 で 滝 凍 れ

凍 滝 に 脈 打 つ 水 の 分 子 か な  
百 年 を 繋 ぐ 塗 椀 雑 煮 食 ぶ

一月十日 朝日カルチャー若草句会

白銀の富士を車窓に初列車  
海風に水仙の鼓動響きけり  
水草の命の動き響きけり  
水仙の向き向きに香を放つ朝  
踏まれても甦る青冬の草  
祝ぎ心喪心乗せて初列車  
水仙の香に曇天の払はれし  
一月十一日 きさらぎ会  
水底に寒鯉石と化してをり  
姐の寒鯉と目の合ひにけり  
泥動くより寒鯉と判るまで  
一月十三日 「かぶとむしの会」句集祝句  
兜虫角は未来を向いてをり  
一月十三日 土筆会選者吟  
初手水母の寝息を確かめて  
波音に誘ひ出されし初明り  
初雀庭の歳月語るかに  
初明り六甲の稜線丸々と  
病床の聖母子像に初明り  
聖堂の屋根に転びて初雀  
一月十四日 工業倶楽部  
首鏡の雪凶器と変りゆく利那  
初鏡紅引くよりの闊志かな  
一声に鳩竦みたる寒鴉  
初化粧粧はぬ母の寝息かな  
一月十八日 不動の庭で遊ぶ会  
一本の早梅といふ孤高かな  
寒の水水琴窟を奏でゆく  
磴一步より探梅の目差に  
一月二十日 登高会  
寒雀啄む先の虚空かな  
恋の句を封印したる初句会  
寒雀膨らみ切つて零れ来る  
風荒ぶとも水仙の気品かな

白銀の都心となりて初句会  
倒れ臥すままに水仙香を放つ  
一月二十一日 廣邦会  
重なりてかさなりて寒鯉の黙  
青々と明けゆく蝦夷の雪明り  
髭ぴくと動き寒鯉沈みゆく  
一月二十三日 青風会東京例会選者吟  
鴨の陣一羽が動くより乱れ  
取瑾なき空に枯木の突き刺さり  
寒雀水面の日差啄めり  
枯色の中水仙の鎮もれる  
六花咲かせ都心の鎮もれる  
一月二十三日 野分会東京例会リモート句会  
指先に魂宿し歌留多取る  
ほろ苦き餠餅に終る恋  
歌留多取る恋を封印せし男  
正客の餠餅を食ふ気品  
一月二十五日 若水句会選者吟  
若水を汲む天帝と対峙して  
ミステリー繻くやうに竜の玉  
一月二十六日 目黒学園句会  
初夢の続きのやうな恋路かな  
水仙の気紛れな向きてふ主張  
聖母の虚子に一喝されてをり  
初夢の虚子に一喝されてをり  
雨降つて雨降つて春隣かな  
色の無き狭庭彩り水仙花  
一月二十八日 カトリック新聞選者吟  
初明り入祭唱の響きけり  
一月二十八日 梅花祭選者吟  
梅早し古刹の庭を塗り替へて  
一月二十八日 「天地」新年の集い投句  
鴨遠く見て近く見て湖の黙  
増上寺寒声に明け初めにけり  
上京と帰郷の続き風冴ゆる

# 雑詠

## 廣太郎 選

藍深き我が空へ来る月を待つ  
 月待てばほろりと眠し一人住  
 女王も汀子も空に月ひとつ  
 流燈のひとつウクライナへ流す  
 壇ノ浦よりの流燈かと思ふ  
 牡丹餅のずしり原爆忌なりけり  
 月光となりて届きし師のことは  
 文机にいまも師のゐる夜長かな  
 師はいつもひとりひとりに生きて秋  
 桐一葉初学の頃の偲ばるる  
 競ひ合ひ笑ひあひたる遠き夏  
 思ひ出の断片拾ふ遠花火  
 清書する新涼の水ひとしづく  
 八朔や背広姿が畦をゆく  
 補習にも二時間目ある夜長かな  
 新涼や贈られてきし佳き句集  
 雨上る朝の旅立秋涼し  
 露の身や腕の怪我まで師に倣ひ

東京 今井千鶴子

同

熊本 岩岡中正

同

横浜 進藤剛至

同

龍ヶ崎 今橋眞理子

同

神戸 藤井啓子

同

長岡 安原 葉

同

同

秋草となるより風を宿したる  
 夕闇に触れて閉ぢたる芙蓉かな  
 穂を閉ぢて夜に濡れたる尾花かな  
 深遠な夜の標や門火焚く  
 美しく悲しみ回す走馬灯  
 街の灯を掬ひ上げたる星月夜  
 城高く仰げば美濃の星月夜  
 生身魂方程式をすらすらと  
 抽斗を溢れ残暑の紙の嵩  
 まほろばに吹かれ矢筈の庭芒  
 一山の涯は尾花の波の涯  
 夕芒うすくれなぬの風渡る  
 浮舟の墓を訪ねて露の宇治  
 丈高く活けて花野の風情かな  
 冷やかや面の内より見る浮世  
 雲現れて水引草を見失ふ  
 また次の飛行機来たり星祭  
 星祭グラスに氷かると鳴る  
 きらきらを急がぬきらや海晩夏  
 改札を風の晩夏へ抜けにけり  
 空は青ゆるめて雲は晩夏へと  
 その話もつと聴きたく麦茶注ぐ  
 蒼々と仏濡れぬる戻り梅雨  
 泡ひとつ吐いて萍つながらぬ

袋井 湖東紀子

同

神戸 玉手のり子

同

同 山田佳乃

同

奈良 古賀しづれ

同

神戸 和田華凜

同

東京 阪西敦子

同

鹿児島 上迫和海

同

波川 木暮陶旬郎

同

同

## 雑詠句評(十二月号より)

### 闘病の始まる春となりにけり 横浜 小川龍雄

「療養」ではなく、「闘病」である。「闘う」という強い意志で  
のぞまれながらも病魔に勝てず、作者は令和四年八月二十二日、  
歸らぬ人となられた。六十九歳という若さ、何よりもご本人が一  
番残念に思われたことであろう。「春」という季節が何とも切な  
い一句ではある。ただただご冥福をお祈りするばかり。(公次)

悲しい事に、作者は令和四年八月二十二日逝去された。お元氣  
な姿しか想像出来ず、未だに信じられないが、病を得て、それに  
立ち向かう姿が感じられる。そのままを叙しておられる素直な前  
向きな姿が伝わってきて悲しい。(廣太郎)

### 若人の墓碑終戦日知らずして 福知山 吉田節子

「終戦日」は「終戦記念日」のこと。第二次世界大戦が終了し  
た八月十五日をいう。戦争へ突き進み多くの犠牲者を出したこと  
を反省し、平和を確認する日。戦争を体験した世代の作者にとつ  
ては忘れられない日。終戦も知らず若い命を散らしてしまつた墓

碑に参り、二度とあのような悲惨な戦争をしてはならないとい  
う思いを一句に込められたのだ。(しぐれ)

日本の勝利を信じて戦火に散っていった英霊の姿である。あ  
のような形で終戦を迎えるとは夢にも思っていなかったのだろう。  
大日本帝国の勝利を信じて逝つた英霊に対する尊い心持が季節を  
通して伝わってくる句である。(廣太郎)

### 朝の家事金魚に餌をやりてより 横浜 高浜礼子

忙しい朝が始まり、家事に手が掛かりだす前に、金魚に餌をや  
るのを欠かさない。口を開けて水槽の縁に集まってくる金魚を見  
ると、何とも癒されることであみうが、何よりも、命あるもの  
やさしい心配りのできる作者なのです。

家事に移る内に次々起きてきた家族が、トントンと水槽をつ  
いて通り過ぎる夏の朝。良き家に飼われて仕合せな金魚。(雅)

金魚掬い等で金魚を持って帰つて来たのは良いが、それを飼う  
となると、水槽等を用意しなければならず結構手間がかかるもの  
である。そして母の家事の仕事がどうしてもひと手間増えるので  
ある。ユニークな視点で季節を捉えている。(廣太郎)

銀河濃し星屑こぼれ落ちさうに

龍ヶ崎

今橋真理子

秋の夜空に横たわっているように光り輝く銀河を見てみると、願い事の叶うようにも思え、また何かを偲びたくなるような雰囲気になることもある。

銀河という光の帯は天球を一周しており、ほとんどの銀河の中心にはブラックホールが存在すると考えられている。とうてい数えることの出来ない数多の光り輝く銀河から、星屑がこぼれ落ちて来そうに見えたのであろう。本当は現実には落ちていたのかも知れない。それらを眺めていた作者の感情は如何ばかりだったのであらうか。(紀元)

山等空気の澄んだ場所では本当に星空が綺麗に見える。特に銀河は最初空に雲が棚引いていてのではないかと思えるほどくつきりと見えるのである。その銀河の星の一つがこぼれるほどの美しさは、例えようが無いほどである。(廣大郎)

気の毒なほど叫ばれる毛虫かな

東京

荒井桂子

毛虫が好きなのは、まずいまいだろう。毛虫を見つけて、悲鳴を上げた。それを毛虫が悲鳴を上げられたというふうに表示して来たのである。そんな悲鳴を上げられるほど大きくも、毒々しく

もないので、気の毒だというわけである、か、この擬人法はどうだろう。客観写生という方法論からは逸れて、月並な主観には陥っていないだろうか。(純也)

動物の中でも嫌われる種類は結構あるもので、毛虫もその中の一つであらう。葉裏等に這っているのを偶然見付けてしまうと、特に女性はいびき声をあげてしまう。そんな様子を気の毒とみている作者の生物に対する情なのである。(廣大郎)

満池谷墓園 埧の蟬しぐれ

西宮

本郷桂子

満池谷墓園というと、広田神社の近くで汀子先生のお墓があるところ。自然の豊かなところであり、神社の杜も広がっているで大変な数の蟬が鳴いているのだろう。埧埧という表現でそんな様子が伝わってくる。長きにわたり汀子先生の傍で俳句を続けて来られた作者の哀しみは深いと想像される。そんな作者の哀しみと蟬時雨の激しさが重なり合っているように思う。(佳乃)

汀子が永遠の眠りにについているのが、兵庫県西宮市にある満池谷の墓園である。作者の御夫君もこちらに眠っておられ、足繫く参って下さっているのがある。蟬しぐれがまるでレクイエムのように聴えてくる。(廣大郎)